

これからの市民交流のあり方を考える



樋口明彦
九州大学大学院工学研究院
環境社会部門 准教授

Civil Engineering という言葉は Military Engineering の対語であり、そのまま訳せば「民生工学」あるいは「市民工学」となる。本来土木は常に市民生活とともにあるべき仕事なのだ。しかし今日の土木の状況は必ずしも市民に身近な存在とはなり得ていない。学会 100 周年に出された「社会と土木の 100 年ビジョン」の中にも、「社会とのコミュニケーションの推進」の項において「不言であることに慣れてしまい、無意識のうちに有言であることを怠ってきた…社会に対して行う説明、対話などのコミュニケーションが不十分であり、またその対応が不親切であった…悪いイメージに誤解されることすらあることを認識すべきであり、有言そして傾聴こそ今こそこれを実行すべきである」と記されている。では、具体的にどうすればよいのか？ 小論はこのことについて考える。

土木コレクション

「土木コレクション」、通称「ドボコレ」。明治から戦前にかけての古い手書き図面を、縦横 145cm の大型パネルに原寸サイズで印刷し展示するという取り組みだ。解説文では、事業の中心となったエンジニアに焦点を当てている。市民の皆さんに土木の本質を知っていただくことを目的に 2008 年から始まった。各地で開催される学会全国大会に合わせてコレクションの数を増やし、現在 90 事例、125 枚のパネルが学会に所蔵されている。昨年は、学会 100 周年記念市民交流事業のひとつとして全国 14 会場で巡回展示を実施し、総計 16 万人の方に見ていただくことができた（詳しくは土木学会誌 2015 年 3 月号 p69）。

市民目線に立つ

これほど多くの方に見ていただけたのには二つの理由がある。一つは展示方法の工夫だ。従来の「箱モノ内開催+限定的な広報+関係者の動員」というやり方では、一般市民に届くものは少ない。もっと積極的に市民に歩み寄るにはどうすれば良いか？ いろいろと考えた結果、人通りの多い屋外空間にパネルをずらりと並べ、たまたま通りがかった市民の方々の中で興味を持ってくださった人に自由に見ていただく、という新しい手法を試みた。会場として選んだのは、札幌駅前通地下歩行空間、新宿駅西口広場、福岡天神大丸パ

サージュ広場、松山大街道商店街等である。箱モノ内開催とは勝手が違い準備はとても大変であったが、これが功を奏した。

もう一つの理由は、古い手書き図面達の放つ強烈なエネルギーだ。展示とともに実施したアンケートで、古図面について「美しい」、「精緻」、「エンジニアの思いが感じられる」等々の感想が多数得られている（各地の会場ボランティアの皆さんの努力により 8,091 名の方から貴重な回答いただくことができた）。精緻な手書き図面の持つ魅力、そしてそこから垣間見える当時のエンジニア達の情熱が、土木とは無縁の人々の感性に強く響いたのだ。

これまで土木は、最先端の技術や、長さ・巨さを売り物に自らをアピールしようとするものが多かった。しかしそうした話題を用いて「土木はこんなにすごいのだ」と自慢してみても、それらは市民生活からは縁遠い非日常のところにあり、人々の心に響くものは少ない。一方、ドボコレで展示したしみだらけの手書き図面達には、明治以来営々と続けられてきた無数の土木の仕事が人々の日常を支えているという事実を、直感的に伝える力があつた。

支部と連携した戦略的な展開を

今年 6 月に「土木広報センター」が誕生した。学会創設 100 周年で提示された広報活動の充実をうけて学会内に創設された組織である。知恵を出し合い、従来のやり方とは一線を画した新しいカタチの取り組みを戦略的に進めていく必要がある。100 周年市民交流事業の中で「ドボコレ」とともに同時展開された「土木カフェ」、「土木ふれあいフェスタ」、そして「土木遺産ツアー」や「市民普請大賞」等がその第一歩だ。これらには全て、土木が市民に歩み寄るための様々な工夫が盛り込まれている。取り組みの効果をきちんと評価し次に繋げること、こつこつと継続的に取り組むことも大切だ。市民としっかり対話できる人材を確保し、学会の規模に相応しいプロの仕事を目指したい。

100 周年市民交流事業は、各支部にとって大きな負担であった。現在の支部は日々の運営で手一杯であり、新たな市民交流を積極的に展開するには人と予算に無理がある。市民交流力の向上は学会をあげて取り組む必要があり、支部の担う役割は大きい。支部事務局機能の強化により本部と各支部とが効果的に連携できる体制を整え、実のある市民交流を全国規模で展開して行っていただきたい。

土木広報センターを中心とした学会各位のたゆまぬ努力により、土木という仕事が市民から信頼され愛される本来の状況に一歩ずつ近づいていくことを心から願っている。